Opinion 国際親善婦人卓球連盟が目指すもの

加藤　妃生子

私たちが神奈川県をベースに日本家庭婦人卓球連盟を作ったのは11年前。組織づくりのむずかしさに何度も立ちどまりました。それでも、いま、世界を舞台に〝ふつうの女性や主婦〟が卓球を楽しめる土台作りまでこぎつけました。

羽田から飛行機で3時間、初めて降りたった台湾・台北空港は、ちょうど初冬の季節で、冷たい雨が一層、寒さを感じさせました。11月9日、私たち日本家庭婦人卓球連盟は台北で開かれる第7回国際親善家庭婦人卓球大会に参加するため、今回はなんと122人の大選手団を送ることになったのです。

これまで、中国へは何度か行っていますが、参加者はせいぜい50人程度。それが、今回は行き先がより出かけやすい台湾ということもあって、100人をこす大世帯になってしまいました。

参加者は羽田のほか福岡、沖縄からもやって来ます。お互いの目印は、サーモンピンクのスポーツシャツと紺のブレザー。異国の地で同じ服装の仲間の姿を目にするというのは、ことさら親近感を抱くもののようです。お互い初対面の人もいましたが、すぐにうちとけることができました。

台湾側の歓迎ぶりは予想以上で、連夜のパーティーでは、政府の高官や全国婦人会会長など要職についている方々が、私たちを出迎えてくれました。台湾のママさん卓球をまとめている台北媽媽卓球倶楽部の実力のほどを、つくづく感じさせられたものです。

今回、初めての台湾で開かれる国際親善家庭婦人卓球大会ですが、前の2回は日本で開催しています。昨年はフィリピン、韓国、香港、台湾が参加しましたし、一昨年はアメリカや英国の選手を迎えました。毎回、その時点で参加できる国に来てもらうのが原則で、できる限りの努力はするけれど、無理をしないというのが、私たちの考えです。

今年の台北には、日本のほかアメリカからの参加もありました。ただ、この〝アメリカ人〟は、中国から亡命したかつての世界選手権のチャンピオンで、台湾のマスコミはまさに熱烈歓迎で、連日、テレビや新聞が追い回していました。ところが、試合で香港と対戦することになったとき、香港の選手が「あんな人（亡命者）とはやりたくない」と一波乱。結局〝アメリカ人〟は試合を遠慮して何とか収まりました。

国によって、それぞれ事情が違うというのも、こうしてみて、初めて実感できるものです。韓国の友人たちは、今回は残念ながら見えませんでした。1年ぶりの再会を楽しみにしていたのですが、外貨の持ち出しが厳しくなっているようで、外国には出かけられないとのことでした。

今回の大きな目的は、大会参加もちろんですが、実は国際的な組織作りということでした。帰国前夜の11日、私と台湾の姚足会長、そして双方の組織の役員とが集まり、「国際親善婦人卓球連盟」の設立を決定しました。家庭婦人とせず、婦人の名称にして、門戸を広げ、基盤をこの国際大会に置くことにしました。また、会長は次期の大会開催国の代表が務めることとし、無用の争い?は極力さけるよう工夫しました。（ただし、目下は次の開催地が香港か韓国か検討中で、会長未定）

今年の大会の私たちの成績は、50～55歳個人戦のタイトルを1つ取っただけです。しかし、それ以上に、国際的な組織作りができたことが最大の収穫です。今後も、「国際平和」を主眼に活動を続けていきたいと思います。

＜加藤妃生子さんの略歴＞昭和28、31年全日本卓球シングルス、32年同ダブルス優勝。29、32年世界選手権団体優勝。31年、同シングルス準優勝。49年、神奈川県家庭婦人卓球連盟を、54年には日本家庭婦人卓球連盟を設立し、会長になり現在に至る。